

4) 培養菌の濃厚菌液に浸漬接種した結果、汚白色の菌株に病原性のあることが認められた。

参考文献

1 舟山広治・平野トシエ (1963) 日植病報28; (2)67

~68. 2 — (1963) 北日本病虫研報14; 47
~48. 3 後藤和夫・大畑貫一 (1956) 日植病報21;
(1)46~47. 4 後藤正夫 (1964) 日植病報29; (5)291
~292. 5 — (1964) 日植病報29; (5)292.

イチゴを加害する新害虫

アカフツツリガ *Lamoria ruficostell* Ragonot

川端源一郎

(福井県農業試験場)

現在までのところ、イチゴを加害する害虫には、線虫も含めて約23種が知られているが、筆者は1966年5月、福井市佐野町(旧川西町佐野)のイチゴ園で、アカフツツリガ *Lamoria ruficostell* Ragonot 幼虫による被害を確認した。ところが、このアカフツツリガによる被害は、これまでに他のいずれの農作物についても報告がなく、害虫としての記録はまったく新しいものと思われる。しかしこの虫の発生分布は、とくに限られた地域だけでなく、かなり広範囲にわたっているようで、今後の発生状況いかんによっては、注目を要するものと思われるので一応報告しておくたい。

本文に入るにさき立ち、同定をわずらわせた、農林省農業技術研究所昆虫同定分類研究室服部伊楚子技官、および調査に御協力いただいた坂井農業改良普及所野坂一司技師、常々有益なご助言とご援助をいただいている当場病虫課友永富博士、黒川秀一技師、今村和夫技師に対し感謝の意を表する。

I 発生地の環境

このアカフツツリガ幼虫による被害が発生した福井市佐野町のイチゴ園は、丘陵地を開墾して造りあげたところで、周囲は北西面がスギ・マツ・雑木林、南東側は水田が開けていて日当たりはきわめて良好な所である。ここにイチゴが栽培されるようになったのは数年前からであるが、同時にブドウも栽培されており、ほ場は立体的な利用がなされている。

II 発生経過の概要

アカフツツリガは、年に1世代を経過し、越冬は幼虫態で行なう。

福井市佐野町での成虫飛来は、7月上旬から始まり、7月中旬~下旬が最盛期、終息期はほぼ8月の末である。

成虫は羽化後まもなく産卵する。産下された卵は乳白色で、大きさは直径約0.5×0.7mm、形は長円形で、これを70~80粒の卵塊にして産みつける。卵は1週間位で

ふ化するがふ化間近になると黒色を呈してくる。

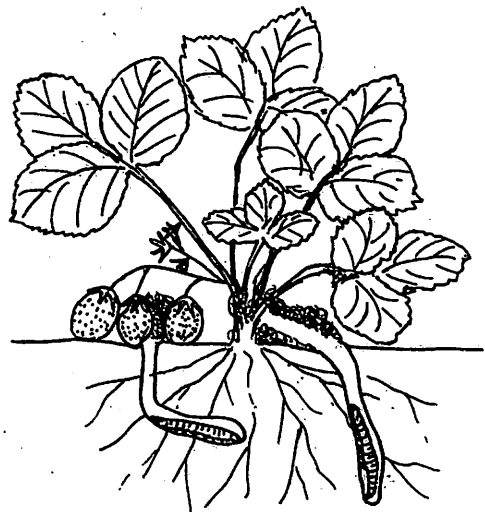
ふ化した幼虫は、卵かくを食いつくした後に移転分散を開始する。分散の方法は、口器から糸状のものを出し、宙づりになりながら他へと分散していく。

幼虫は若令幼虫期は茶カッ色をしているが、老令幼虫になると、光沢のある黒色~黒褐色となる。大きさは老令幼虫で、体長が3~4cm、体重が150~200mg程度、動作は機敏でとくに前後への動きはきわめて敏しょうである。老熟した幼虫は、土中でマユをつむぎ、その中で蛹化するが前蛹期は約3日間を要する。

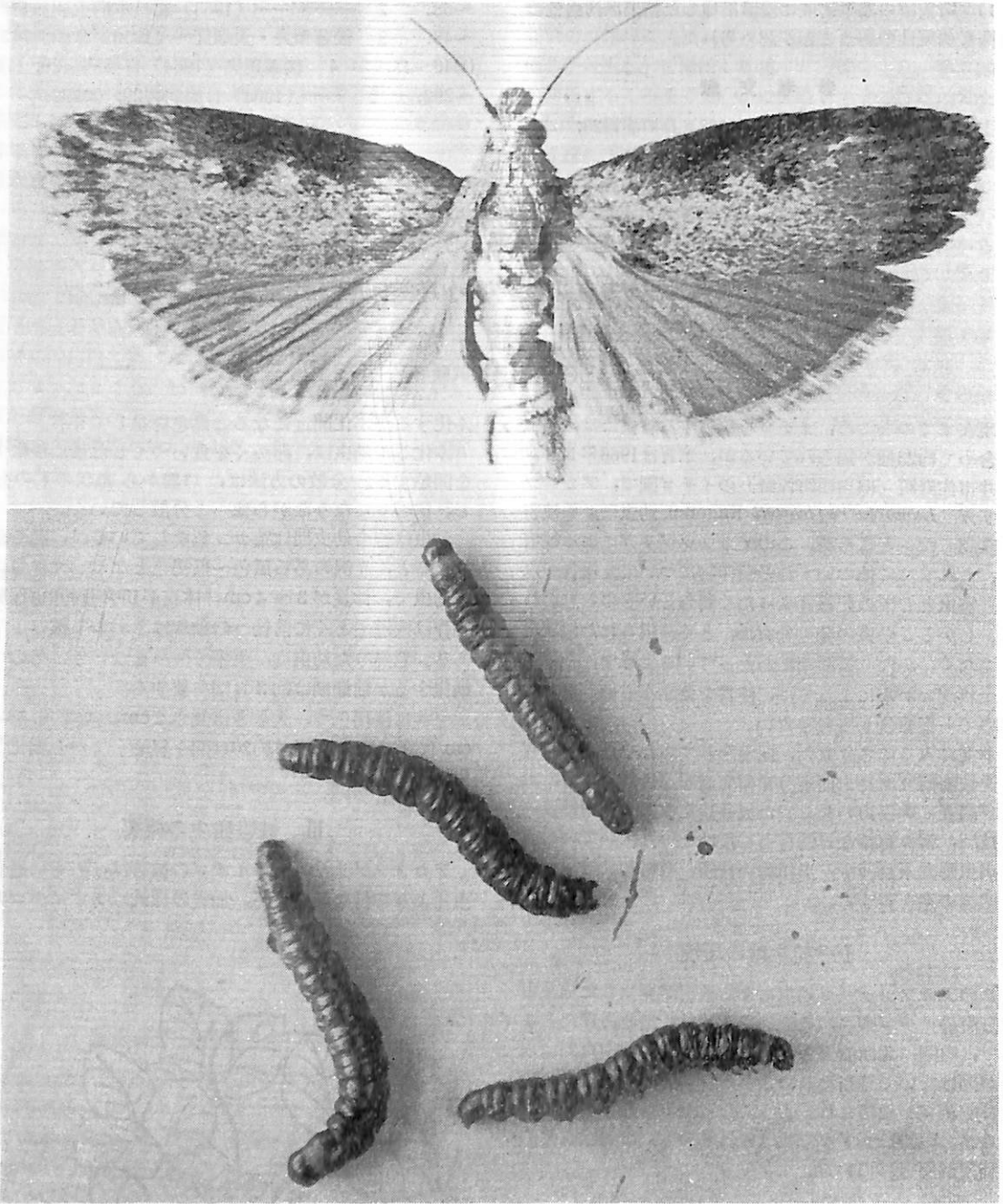
マユは淡褐色で、大きさは長さ2cm、幅が0.5~0.7cm程度である。蛹は約20日間を経過してから羽化し成虫となる。

III 被害発生の概要

アカフツツリガによるイチゴの被害は、おもに越冬幼虫によって行なわれるが、加害の様式はまずイチゴの株



第1図 アカフツツリガ幼虫の加害模式図



第 2 図 アカフツリガ雌成虫 (上) および老熟幼虫 (下)

元の土中(地下10cm位)に巣をつくり、そこを拠点として、加害部までトンネル状の通路を造っておもに土面に接している果実および葉柄、果こうやその冠部を食害する。したがって果実を食害されたものは、商品価値がなくなり、冠部を食害されたものも減収は免れず、その被害度はかなり大きい。現地ではこのような被害が発生面積にして1.5haあり、株率にして約30%が大なり小な

りの被害を受けている。

加害の時期は、越冬幼虫によるものが、4月中旬から始まって、イチゴの収穫期である5月～6月に加害最盛期となる。新生幼虫は9月頃から現われるが、これによる被害はまだ認めていない。

以上簡単な調査結果を報告したが、発生分布、生態、防除法などについては、今後さらに究明して行きたい。